

Bookstart Newsletter



2022
夏
No.77

ブックスタート・ニュースレター



神奈川県相模原市

特集

子育てを地域で支える

～ 政令指定都市 神奈川県相模原市の取り組みから ～

「暑かったですねえ。赤ちゃん、頑張りましたね」初夏の暑さを感じる陽気の中、ブックスタート会場にやってきた親子に子育てサポーターが声をかけます。「ふみきりかんかんかん」心地よいことばのリズムに合わせて、お母さんの膝の上の赤ちゃんが手足をパタパタして喜んでいました。

ブックスタートでは、赤ちゃんの目の前で絵本をひらき、その楽しい体験とともに絵本をプレゼントします。しかし事業を行う自治体の中には、長引くコロナ禍において、感染拡大防止のため、やむを得ず絵本の読みかきせを控えているところがあります※。一方で、より良い実施方法を模索しつつ読みかきせを再開する自治体もあります。

神奈川県相模原市は、年間約4600人の赤ちゃんが誕生する政令指定都市です。コロナ禍で休止していた読みかきせを、2022年1月に再開しました。どのように絵本を手渡し、事業を運営しているのでしょうか。その取り組みを紹介します。

※2021年度に読みかきせを年度内全期間または一時期休止した自治体…65%
2021年度実施状況確認シートをもとに集計。
(2022年6月末現在/n11001)

ケーススタディ
神奈川県相模原市

2018年8月に事業を開始

相模原市の「ブックスタート事業」は2018年8月に開始しました。その2年前の2016年4月、4か月児健診で親子に絵本の読みかきをする「親子コミュニケーション支援事業」がスタート。とても好評でしたが、参加率は4割に届きませんでした。そこで参加率を上げ、さらには絵本を介した親子のコミュニケーションが継続して持たれるよう、絵本の予算を獲得。同事業を拡充する形でブックスタートを始めたところ、参加率は約9割に上がりました。

ブックスタートに参加した保護者へのアンケート調査には、次のような感想が寄せられました。

「どのように絵本を読んだらよいのかが分かり、家でも真似して読んでみました」「もともと絵本は子どもにとって初めての絵本で

● 相模原市ブックスタート運営体制 ●



す。とても気に入っているようで毎日読んでいます」

絵本のプレゼントが加わったことは、参加率の向上だけでなく、家庭で絵本を開く具体的なきっかけにもなっています。

市民と協働して事業を運営

県内で2番目の面積を持つ同市では、7つの会場で年間90回、ブックスタートを実施しています。現場を担うのは、緑区・中央区・南区の各区ごとに事業の委託を受けた、子育て広場の運営団体です。当日は団体のスタッフがコーディネーターとなり、こども家庭課が募集・養成した子育てサポーターとともに事業を行

います。

こうした体制を取る理由について、同課の濱田絵理さんは次のように話します。

「子育て広場の運営団体が事業に深く関わることで、スタッフと保護者が顔の見える関係になり、保護者は広場に足を運びやすくなります。子育てサポーターは、子育てを応援したいという気持ちでブックスタートのほか親子サロンや多胎児支援など市の事業で活躍している人たちです。市民との協働により、ブックスタートが円滑に運営でき、さらに地域の中にある子育てを応援する人たちと親子とのつながりも生まれています」

「感染対策」と「読みかき」の両立のために

コロナ禍での読みかきかせは、感染対策のため消毒などの手間が増えたり、やり方を一から見直さねばならない場合があります。同市でも、読みかきかせの再開前に、複数組の親子の協力を得て方法を検討しました。まず、親子と読み手との距離を広く空けて読みかきかきかせる場所、赤ちゃんの視線が絵本以外のものについてしまいました。そこで再開時



間隔を空けて4か所の読みかきかせコーナーを設置。コロナ前は6か所ありました。



アクリル板越しでも絵本をじっと見つめる赤ちゃん

にはアクリル板を間に立てて近距離で読む方法に変更。親子と読み手が安心して向き合うことができ、赤ちゃんが絵本をしっかりと見るようになりました。

消毒は、親子が座る場所はひと組ごとに行いますが、読み手側は、担当者も固定して回数を最小限にしています。消毒にかける時間を減らすことで、可能な限り親子を待たせずに誘導するようにしています。

このようにコロナの感染状況を考慮しつつ、感染対策と読みかきかせ

両立のためのより良い方法を見出し
ています。

コロナ禍で増す ブックスタートの役割

同市では、ブックスタートでの読みかせを通して、赤ちゃんとのコミュニケーションの取り方がわからないという保護者に、絵本でふれあえることを知ってもらい、育児の不安を少しでも和らげたいと考えています。感染対策でひと組にかける時間を5分に短縮したため、子育て支援情報の説明は簡単なものになりましたが、絵本は従来通り全ページ読んで、せいっぱいの楽しいひとときを届けています。

濱田さんは「コロナ禍では、外に出る機会や他の保護者との交流がなく、孤独感を抱えて健診に来る保護者もいます。でもその気持ちを口に出せる人はそう多くはいません。ブックスタートは健診に来た全員に自然な形で声をかけて絵本の話ができます。地域のひとと、ほんのひとときでも話をしたり広場に誘ってもらったりするのは保護者にとっても嬉しいこと。ブックスタートの役割は増しているように思います」と話してくれました。

Interview/
インタビュー

(緑区) 子育て広場運営団体

ふぁみりいさぽおと
カーサ ディ バンビーノ
Casa di Banbino

石原明美さん(写真左) 近藤智恵子さん(写真右)



Q. コロナ禍の保護者の様子を 教えてください

子育て広場に来る保護者の中には、感染が心配で赤ちゃんが9か月になるまで連れて来れなかったという人もいます。不安をずっと抱えてきたんだろうなと考えると、よく来てくれたなと思わずにはいられません。

帰省も難しく、孤独になってしまっている人が増えているように感じます。広場などの支援拠点とつながっていない人はまだ多いと思うので、ブックスタートで周知をすることはますます大事になると思います。



お兄ちゃんもいっしょに。いい笑顔だね！

Q. 読みかせを再開していかがですか

健診で疲れた顔をしていた保護者が柔らかい表情で帰るのを見ると、再開できて良かったと思います。絵本を読んでもらい、あたたかな気持ちを受け取った保護者は、今度は自分で我が子に読んであげたいと思うのではないのでしょうか。絵本をツールに親子でコミュニケーションを楽しんで、我が子を愛おしく思ったり、赤ちゃんが愛情を受け取って幸せを感じてくれたらいいですね。

Q. 事業を運営する上で 大切にしていることは何ですか

子育てサポーターも私たちも、楽しく助け合うことを大切にしています。誰でも、困った時には助けてくれる人がいるんだと感じると安心しますよね。だからまずは私たちが助け合ってその姿を親子に見てもらい、希望を持って地域に出てきてくれたらいいなと思います。地域の色々な場所で人と人が支え合うことが、地域ぐるみの子育て支援へとつながるのではないのでしょうか。



相模原市のみなさん



NPO ブックスタート主催

いっしょにえほん 写真コンテスト 2022

受賞作品決定！

赤ちゃんにとっての絵本は、read books（読んで理解するもの）ではなく、share books（誰かと一緒に楽しいひとときを共有するもの）——

ブックスタートで伝えているこの「シェアブック」の趣旨をより広く伝えるため、2022年4～5月の約1か月間、写真コンテストを開催しました。

SNS（Instagram / Twitter / Facebook）上で、子どもとの絵本のひとときやその思い出の写真をひと言エピソードとともに募集したところ、356点の応募がありました。

選者による協議の結果、大阪府の aimama さんの作品が大賞に決定。お父さんの上に寝転んだり、背中越しにのぞき込んだり自由に絵本を楽しむ様子や、楽しそうな声が聞こえてきそうな臨場感が選者の注目を集めました。エピソードからは、この写真を撮影した aimama さんも一緒に絵本のひとときを楽しんでいる様子が伝わってきます。

選者（五十音順）

浜田 桂子 さん（絵本作家 / 日本児童出版美術家連盟 理事長）

ふわはね さん（読書アドバイザー / 絵本講師）

三輪 丈太郎 さん（子どもの本専門店店主）

吉田 明世 さん（アナウンサー / 絵本専門士 / 保育士）

NPO ブックスタート

たくさんのご応募
ありがとうございました！



大阪府 aimama さん

父ちゃんの絵本の読み方は独特！急に効果音が流れたりするから、子どもたちはワクワク聞いています。私も洗い物したりしたいのに、絵本の話が気になってつい聞いてしまいます。息子たちはいつもの絵本なのにワクワクが止まらず、寝る前なのにテンションが上がってしまうほど！子どもたちにとっても、父ちゃんにとっても楽しみな時間♪

その他の受賞作品は、当 NPO ウェブサイトで公開しています。選者のコメントも掲載していますので、ぜひご覧ください！▶

(<https://www.bookstart.or.jp/2846/>)



ことのは

NPO ブックスタートのスタッフが出合った言葉

守られる体験をした子どもは、生涯それを忘れることはなく、いつかどこかで、だれかを守る存在になると思いませんか。

「ふるさとして呼んでもいいですか 6歳で「移民」になった私の物語」（ナディ・大月書店）より

家族と暮らし、友達とあそび、学校で学ぶ——。1991年に情勢不安定なイラクから6歳で来日し、大人になったナディさんは、それが叶ったことを「守られる体験」として心に刻んでいます。迷子の弟を探してくれたアパートの人たちや、梅干しの味を覚えてくれたゆいちゃんのおばあちゃん。本書に登場する大人たちの言動に、子どもを「守ること」は心を寄せ、言葉をかけることに始まると気付かされました。

お知らせ

ブックスタート オンライン
全国研修会 2022 開催！

日時：11月29日（火）
13:30～16:00

内容等、詳細はウェブサイト「お知らせ」をご覧ください▶

